

逝去された名誉会員への追悼文

染谷四郎先生を偲んで



大正2年5月11日生
 昭和15年 東京帝国大学医学部
 医学科卒業
 昭和15年 公衆衛生院勤務
 昭和16年 厚生科学研究所技手
 昭和21年 公衆衛生院講師
 昭和26年 国立公衆衛生院衛生
 微生物学部長

昭和40年 国立公衆衛生院次長
 昭和42年 日本公衆衛生学会幹事長（～昭和45年）
 昭和47年 国立公衆衛生院長
 昭和56年 国立公衆衛生院顧問
 昭和59年（叙勲）勲二等旭日重光章
 平成16年9月21日 逝去

染谷四郎先生に初めてお会いしたのは昭和29年、筆者が公衆衛生院の正規医学科課程（1年コース）受講中のことで、先生は既に衛生微生物学部長として大活躍しておられた。米国のGordon教授が来日され、その特別講義の中で、“Agent, Environment and Host”の話がされた折の明快な司会ぶりが大変印象深く記憶に残っている。

筆者は昭和30年から公衆衛生院の母性小児衛生学部で勤務したが、当時、部長を兼任しておられた斎藤 潔先生（当時の次長、後に院長）のお手伝いで百日咳ワクチンに関する仕事に関わった時、研究班の委員長を務めておられた染谷先生の見事な会議運営に驚いたことがある。先生は公衆衛生院の重鎮として活躍しておられた少壮部長だったのである。

その後、筆者の仕事は小児の身体発育に移ったので、直接に染谷先生からご指導頂くことは少なくなったが、先生がその後、次長そして院長にご昇任の経過の中で、鈴木武夫先生（当時の労働衛生学部長、後に次長、院長）や林 路彰先生（当時の母性小児衛生学部長）と共に斎藤 潔先生を支えながら公衆衛生院の新しい方向を明確にさ

れ、それに向かって現実的な発展の道筋を構築されたことに一研究員の立場から敬意を感じていたことを思い出す。

院長という管理職のお立場で染谷先生が最も力点をおいておられたのは公衆衛生院の大学院構想であったと思う。ロックフェラー財団の絶大な寄付の経緯を含め公衆衛生院創立の目的に関する当時の考え方は公式の各周年記念誌に記載されているが、野辺地慶三先生（初代の疫学部長・衛生微生物学部長）の秘話として伝えられている大学院構想についても染谷先生から何回も聞かされていた。先生は“School of Public Health”としてのWHOの査察、国立試験研究機関における学位授与の制度化構想、文部・厚生両者共管による大学院大学構想、厚生省令による公衆衛生学博士の制度化構想など多くの画期的な構想の基に新しい公衆衛生大学院の設立に向けて多大のご尽力をされた。その方向性は、その後、歴代の院長に受け継がれて努力がなされたが、時代の流れが必ずしもその実現を推し進める方向と一致しなかったことは悔やまれてならない。今日、実現されている法科大学院を始めとした独立大学院の実状を考えると時代のズレを感じざるを得ない。公衆衛生学者として大成された染谷先生にとって唯一の心残りだった点であろう。

染谷先生は昭和42年から45年まで本学会の幹事長を務められ、当時の難しい学会運営の中で、今日定着している分担金制度など学会発展の基盤を固められた。これらの経緯については、先生と一緒に筆者も出席させて頂いた本学会総会60回記念座談会（第3回）に詳しく述べておられる。

筆者が院長時代、染谷先生は顧問のお立場から陰に陽に心温まるご支援を下された。お蔭で微力ながら院長としての務めを果たすことができたと思っている。

仕事には厳しい反面、後輩には常に温かく接して下さった染谷先生に改めて御礼申し上げ、心からご冥福をお祈りいたします。

元国立公衆衛生院長 高石昌弘

吉田 亮先生を偲んで



大正13年 1月25日生
 昭和23年 千葉医科大学卒業
 昭和28年 千葉大学医学部小児
 科学助手
 昭和32年 千葉大学医学部小児
 科学講師
 昭和43年 千葉大学医学部公衆
 衛生学教授

昭和50年 中央公害対策審議会専門委員
 昭和56年 千葉大学評議員
 昭和59年 千葉大学医学部長
 昭和63年 千葉大学長
 平成6年 千葉大学名誉教授
 平成11年 (叙勲) 勲二等旭日重光賞
 平成16年 7月27日 逝去

吉田亮先生は、昭和23年9月千葉医科大学をご卒業後、千葉大学医学部小児科学講師を経て、昭和43年1月医学部公衆衛生学教授に就任、昭和59年千葉大学長になるまで16年余り教室を主宰されました。

先生の研究は、小児科学分野と公衆衛生学分野に間するものに大別されます。

小児科学領域では、疫癘、人工栄養児の栄養素代謝、気管支喘息の研究があげられます。特に小児気管支喘息の研究では、免疫学的手法をいち早く採り入れ、気管支喘息発病に至る病態の解析に新しい知見を与えました。

公衆衛生学の分野では大気汚染の生体影響の研究があげられます。工業化による公害が社会問題と深刻化する中、千葉県でも大気汚染の地域住民の健康への影響が憂慮されました。先生は小児科領域で行ってきた気管支喘息と環境因子に関する研究の知識・経験を基礎として、大気汚染の人体影響に関する研究を行いました。地域住民を対象とした大気汚染の疫学的調査法の確立、二酸化窒素の環境基準の妥当性の検討、大気汚染物質による呼吸器系への病変を動物実験により病理学的解明等を行いました。これらにより大気汚染が住民

の健康を阻害することを疫学的に明らかにし、健康保持上守るべき二酸化窒素濃度を提唱し、二酸化窒素の環境基準の策定、見直しに貢献しました。大気汚染による公害訴訟では、進行する大気汚染とともに急増する気管支喘息を臨床の場で身をもって感じていたために、患者、弱者側の立場を貫きました。平成4年には第33回大気汚染学会会長を務められました。

教育面では千葉大学医学部長、千葉大学長として大学の管理・運営に貢献されました。医学部長として、文部省の「医学教育の改善に関する調査研究協力者会議」の一員として医学教育改革のための指針を示されました。学長として長期的展望の下に総合大学としての整備方針を策定し、教育目標の設定と4年あるいは6年一貫教育を目指した教育改革の基本方針の策定など、現在の新しい大学の基礎づくりに貢献されました。

先生は教室員の自主性を尊重され、時折少ない言葉でご指導下さるだけで自由に研究させて下さいました。このため環境衛生、福祉関連の研究者ばかりでなく行政面にも多くの人材が先生のもとに育ちました。

大学退官後は多くの公職を退かれ、趣味の油彩を楽しんでおられました。永年のご功績により平成11年に勲二等旭日重光章を受けられました。

まだやり残されたこともあったかと思いますが、先生のご遺志は教えを受けた者の心の中に引き継がれています。先生どうぞ安らかにお休み下さい。

千葉大学名誉教授 安達元明

吉田亮先生は、学生時代から病気と社会との関係に強い関心をもたれ、同年代の仲間が協力して、「千葉大学社会医学研究会」を組織され、中山毛織工場の工員の結核健診をはじめとして、五井町の全町民の健康管理を組織するなど、その後の千葉大医学部学生の社会的活動を常にリードしてこられました。吉田先生のご冥福をお祈りいたします。 日本公衆衛生協会理事長 北川定謙